

日本赤十字九州国際看護大学学術情報リポジトリ

タイトル	ジャガ芋大飢饉のアイランド：一八四五年から一八四八年
著者	徳永哲
掲載誌	文学における表層と深層(梅光学院大学公開講座論集；43). pp 87-108.
発行年	1998.10.15
版	publisher
URL	http://id.nii.ac.jp/1127/00000307/

<利用について>

- ・本リポジトリに登録されているコンテンツの著作権は、執筆者、出版社(学協会)などが有します。
- ・本リポジトリに登録されているコンテンツの利用については、著作権法に規定されている私的使用や引用などの範囲内で行ってください。
- ・著作権に規定されている私的使用や引用などの範囲を超える利用を行う場合には、著作権者の許諾を得てください。
- ・ただし、著作権者から著作権等管理事業者(学術著作権協会、日本著作出版権管理システムなど)に権利委託されているコンテンツの利用手続については各著作権等管理事業者に確認してください。

徳永 哲

ジャガ芋大飢饉のアイルランド

——一八四五年から一八四八年——

一 一〇〇万人の餓死者

アイルランドにジャガ芋の大凶作が見舞ったのは一八四五年から四八年のことであった。その前にも、一八一七年にも凶作があり、何千人もの餓死者をだしたとされているが、それとは比較できないほどおびただしい数の一〇〇万人もの餓死者がたとえられている。また、この大凶作がもたらしたものは餓死だけではなかった。一〇〇万人以上の移民の群れをアメリカをはじめイギリス、カナダなどへと排出したのである。移民といえは聞こえはそれほど悪くはないが、実際は現代のアジア諸国に生じている難民とほとんど違うものではなかった。

飢餓と疫病のうつほと化した地獄のようなアイルランド西部を逃れた貧しい移民の群れは、通称「棺桶船」と呼ばれていた船に乗り込んだ。その船は、ほとんどが北アメリカ大陸などから材木や

穀物をイギリスに運んで来た貨物船であった。空船で帰るところを、巧みな誘い文句で貧しい小作農民たちを安い運賃で募り、船底に貨物同様に詰め込んだのである。人々は糞尿や汚れ物の悪臭が蔓延するなか、空腹に耐えて大陸に着くのを待ち望んだであろう。しかし、その多くが嵐にあい、大西洋の荒波の中に消えていった。また、沈没しなくとも、船の中で飢える者、疫病にかかる者が多く、夢の大半は船底で潰えていったのである。

アメリカに渡ることができても、貧困から抜け出すことはほとんど不可能に近かった。男はその大半が金鉱発見の夢を求めて、西部へと流れて行き、女はボストンなどの東海岸の大都市の町工場などで働いた。しかし、女の多くは結局夜街の女として身を崩していったらしい。そうしたアメリカへ渡った若い女の悲惨な生き様はリーアム・オフラハティの短編『手紙』^①で感動的に綴られている。父親へ宛てた娘メアリーの手紙には、アイルランドからアメリカに渡って、貧困から娼婦に身を落としてしまった純情な田舎娘の悔やみと悲しみが呻きにも似た調子で述べられている。

ちなみに、アメリカへ旅立つ者を見送る集いが各家庭で催されたが、それは「アメリカの通夜」と呼ばれていた。リーアム・オフラハティはやはり短編『旅立ち』^②で、旅立ち前夜のパーティをとおして、異国の地へ息子と娘を送り出す父親パトリックの心境にアイルランド人の誇りと気品を巧みに織り込んで情緒豊かに描き出している。そのパーティは希望に満ちた旅立ちの祝いではなく、永遠の別れを惜しむような悲しみと失望に満たされている。

今日、餓死者が多く出ている地域の最大の原因は自然の異変あるいは突然起こった大災害である。

アフリカの赤道付近で起きている飢餓は大地の砂漠化という、大自然による生命の拒絶である。餓死とは、わたしたちの頭の中では、こうした人間の力がとても及ばない大自然の天変地異が必ず結び付いているのではないだろうか。ではジャガ芋の凶作、これは芋類にしか発生しない「胴枯れ病」(アイルランドではジャガ芋のコレラと呼ばれていた)が原因であるが、そのようなものが天変地異でも起きない限り生じないような大飢饉となったことをどう理解すればよいのであろうか。凶作はジャガ芋だけに限られていたことを考えるとき、この出来事は本当にあったのだらうかと疑いたくなる。食物のうち一品目が凶作になって、取れなくなってしまうたに過ぎない話なのである。小麦粉やコーンなどは輸出しており、牛乳も生産していた。さらにチーズ、バターなどの乳製品はイギリスからアイルランドに入ってきて来た。また、野菜も作られていた。

日本では、かつて、米の凶作が起こると貧しい小作農民たちは粟や稗でなんとか飢えをしのいだとされているが、ケルトとゲルマンの違いはあるにしても同じヨーロッパの民族であり、しかも、プロテスタントとカトリックの違いがあるにしても、同じキリスト教の国である。しかも、イギリスという、当時では世界を支配下に治めるほどの大強国のすぐ隣りに位置し、その統治下にありながら、ジャガ芋が主食であったとはいえ、何故に一〇〇万人もの餓死者が出るようになってしまったのであろうか。

また、アイルランドの人口の変化を振り返っても、約五〇年間の人口の増減は異常である。一八〇〇年には四五〇万人だった人口は一八二一年には六五〇万人、一八四一年には八〇〇万人にまで

達している。四〇年ほどの間に人口は倍近くまで膨れ上がり、その後一〇年もたない一八四九年には二〇〇万人以上の人口が減少している。四人につき一人までがアイルランドから消えていなくなったということになる。この異常な事態と原因との間には、あまりに大きな隔りがある。ジャガ芋の凶作という一つの原因から歴史的大事件までになってしまいうには、その原因に加えて、さらに大きな、恐ろしい要因が働いたとしか考えられないのである。その要因とは「偏見」である。

二 白いチンパンジー

アイルランドは大体、ダブリンを中心とした東部とゴールウェイ、メイヨー、リメリックなど西部に分かれる。ジャガ芋の大凶作によって餓死者を出したのはその西部から北部にかけてとされている。東部は商工業とイギリスとの貿易がさかんで、しかも、ダブリンやウィックロウには裕福なイギリス人やイギリス系のアイルランド人が町をつくって住んでいた。それに対して西部地方は土地が痩せ、イギリスとのつながりは薄く、産業もほとんど無く、近代文明からは取り残されるように独特な、停止したような歴史のなかにあった。

また、十九世紀のアイルランドはごく少数の地主階級と大多数を占める小作農民とに区分されていた。そして、その小作農民のほとんど全部と言っても良いぐらいに、カトリックであった。したがって、西部はほとんどが貧しいカトリックで、彼らは作った穀物類を地代として地主に納め、余った土地に栽培していたジャガ芋を自分たちの糧とした。労賃はほとんど無かったらしく、現金収

入には極めて乏しいのが現状であった。

ジャガ芋は痩せた土地でも栽培できたらしく、小作農民たちは自分たちの大切な食いぶちとして大切に育てた。しかし、急激な人口の増加は狭い小作農地をさらに狭くしていった。ジャガ芋だけに頼る人口ばかりが膨れ上がっていったのである。無理な植え付け、栽培がやがてジャガ芋自体の抵抗力を弱らせ、病気を招くことになってしまったのである。そして、凶作が起り、その度に餓死者を出し、海外移住が盛んになっていく時であっても、それでも、人口は増え続けた。極端な食糧不足と急激な人口増加、このアンバランスの拡大は後に来るあの恐ろしいジャガ芋大飢饉を十分に予感させるものであったにちがいない。

ここにイギリスの責任としか思えない、重大な問題が浮かび上がってくる。収入も無く、ジャガ芋しか食べることでできない貧しい小作農民がジャガ芋を得ることができなくなった場合、小作農民への救済援助が全くなされなかったとしたら、その結果はどういうことになるか、まったく明らかなことであるからである。結果は、「餓死」か、他国への「移住」しかないのである。

ジャガ芋には多くの栄養源が含まれており、イギリス人は、アイルランド人にはジャガ芋と一杯のミルクがあれば十分であると思っていたようである。しかし、ジャガ芋が腐り、山羊や牛が栄養失調になり、乳を出せなくなったときアイルランド人がどうなるか、イギリス人には分かっていたはずである。結局、当然起り得る事態を、あるいは現に起こっている事態を、イギリス人は見て見ぬ振りをし、無視しつづけたのである。

第二次世界大戦中にドイツのヒットラーがおこなったホロコーストで五〇〇万人以上のユダヤ人が虐殺されたとされている。毒ガスと機関銃を使って大勢のユダヤ人を三年間にわたって日夜殺し続けた結果がその数なのである。アイルランドのジャガ芋の大凶作では、イギリス兵といえども、地主を守るために銃を小作農民に向けることはあったかもしれないが、虐殺目的で銃を向けた者はいなかったはずである。

しかし、意外にも、この大凶作が歴史的大惨事となった背景には、ヒットラーのホロコーストと、本質的には、極めて類似している点があったと思えるのである。ホロコーストのように近代兵器による大量殺人でなかったことは言うまでもないが、根底の意識にはドイツ人がユダヤ人に対して抱いていたものと同じ卑下と嫌悪と軽蔑などが混然と入り交じっていたと考えられるからである。野蛮で、この世に必要な無い人間、同じ人類を名乗るのも恥ずかしい生き物、そうした蔑視がイギリス人の意識の中に、アイルランドを蹂躪しつづけた歴史を通して存在し続けていたのである。トマス・カヒルの『聖者と学僧の島』^③が一九九七年に青土社から翻訳出版された。その「序」に「歴史はどれくらい真実なのか」と題して一〇頁程度が費やされている。その中にヴィクトリア朝時代のアイルランドの、飢饉による極貧状態を目撃した歴史家チャールズ・キングズリーがアイルランド人に対して次のように印象を書いている。

何百マイルにもわたる、ひどい状態の国で、わたしは人間のチンパンジーたちを見て、肝をつぶしてしまった。彼らがこうなったのもわれわれの責任だなどと、わたしはけっして思っていない。彼らは以前に比べると人口がふえただけでなく、われわれの支配のもとではるかにしあわせとなり、生活程度、食糧事情も向上し、住いもよくなったとわたしは信じている。しかし、こうして白いチンパンジーを見ることはなんとも恐ろしい。彼らが黒人だったら、こんな気持ちにはならないだろうに。その肌は、露出して日に焼けた部分を除けば、われわれとおなじまっ白なのだ

人間の姿をした人間以下の野蛮な白い生き物、すなわち「白いチンパンジー」がキングズリーの見たアイルランド人なのである。このチンパンジーに人間らしい生活をおくれるようにしてあげたのは外ならぬイギリス人である。キングズリーは言っている。これはキングズリーだけに限ったことではなく、イギリス人が長年にわたって抱いていたアイルランド人に対する「偏見」を代表しているのではないだろうか。

三 屈辱の歴史

アイルランドの歴史はイギリス人による蹂躪と卑下と侮辱の歴史であった。それは、一一七一年ヘンリー二世が完全武装した騎士団、歩兵団を率いてアイルランドに上陸して以来始まったとされている。それは八〇〇年たった二十世紀に至っても続いたのである。

しかし、アイルランドの悲劇の元はイギリスにだけあったのではない。アイルランド人自身の内にもあったのである。一九一六年に、アイルランドの独立と自由をかけたアイルランド義勇軍は復

活祭に武装蜂起をした。ダブリンの中央郵便局を拠点にイギリス軍と戦ったが惨憺たる敗北であった。この悲惨な事件の後、W・B・イエイツは『骨の夢』という詩劇を書き、「もはや夜は過ぎ去った」と新しいアイルランドの歴史の幕開きを確信した。その『骨の夢』のなかに、次のような箇所がある。

若者 どんな罪が一体これほど長く記憶に残るのか。

どんな罪のために孤独でさまよう恋人たちの唇は

引き離されたままなのか。

若い女

彼女の愛人である王は

彼女の夫によって戦いで打ち負かされたのです。

そして彼女のためと自分自身のために、激しい恋のあげく

前後の見境もなく敵意を抱いて、

彼は海を越えて外国の軍隊を引き入れたのです。

若者 君の言うのはノルマン人を引き入れたあの

デアミアードとダヴォーギラのことなのか。

若い女

そう、その通りです。

自分の国民を売って奴隷にした世にもみじめで

世にも呪われた二人のことなのです。…

このデアミアードとダヴォーギラとは十二世紀半ばのアイルランドに生きた男女である。デアミアードはレンスターの王で、ダヴォーギラはブレフニイの王の妻であった。二人は、今日で言う不倫をして、ブレフニイの王の復讐を受けたが、イギリスに渡ってイギリスの王ヘンリー二世に救いを求めた。そのアイルランド人自身の売国的裏切りによって本格的にイギリスの侵略が始まったとされている。

一九一六年、イエイツが突発的暴挙としか理解できずに、驚き、戸惑った復活祭武装蜂起。アイルランドの将来を担う若者たちの血が無残にも流された。精神的に荒れ果て、誇りも無くしつづめるアイルランド、そしてその失望的な悲しい蜂起事件はイエイツの思いをアイルランドの悲惨な歴史の発端へと運んだのであろう。イエイツは、その二人の罪は八〇〇年たったそのときでも「許すことはできない」と繰り返し、強調している。

イギリスから受けた屈辱の歴史は、八〇〇年であったが、しかし、アイルランド人はその屈辱をはらすためにイギリス軍と戦い続けていたかというところというわけではない。その戦いがあつたとしても部分的であり、散発的であった。二十世紀に入ってからアメリカの援助を得て、自由独立の運動が表面化するが、その当初はほとんど結束らしい結束はなされていなかった。

ケルト民族の血を濃く受け継ぐアイルランド人は一国のもとに結束することを苦手とされていた。ケルト民族は、元来部族国家形態を取る民族であった。その部族国家のなかの王を中心に、厳格な主従関係が強いられていた。その小国家の支配者が交替しても、主従関係は同様に継続され、その

関係は一種の契約のようになっていたのではないかと推測する。したがって、小国家の支配者の都合が民を動かすことはあっても、部族を超えた統一国家の下に全ての民が結束するということはなかったのである。国政への無関心、無気力はそうした歴史のなかで培われていったに違いない。それがカトリック信仰と強く結び付き、意識的慣習となって残ったのであろう。この刹那的な世界に執着することよりも、永遠の世界に行けることを願い、奇跡を信じて聖母マリアや聖人の像に「祈る」アイルランド人となったのである。

神秘性を敬い、迷信を守り、そして偶像を崇拜する、そのような信仰のあり方はイギリス人の気質と信仰の在り方とはあまりにも違い過ぎていた。アイルランドのカトリック信仰はイギリス人からは「異端者」にさえ思えた。また、イギリスの当時の首相ベンジャミン・デイズレーリは近代文明とはかかわりの無い人種とアイルランド人を「この荒々しくて向こうみず、怠惰で気まぐれ、おまけに迷信深い人種は、イギリス人の気質とはまったく相容れない。彼らの理想とするところは、氏族同士の喧嘩と、下卑た偶像崇拜をくりかえす生活である。その歴史が、頑迷さと流血のときれることのない輪を描きだしている」と述べたことが『聖者と学僧の島』に書かれている。⁵⁾

イギリス人がアイルランドを支配するのに一番てこずり、結局支配できずに逆効果だけを残したのが、改宗であった。そもそも、アイルランドにヨーロッパ大陸のローマン・カトリックの優位性を示そうとして、教皇ハドリアヌス四世がイギリスの国王ヘンリー二世にアイルランド征服の命を与えたのが、アイルランドを宗教的に支配しようとした最初であった。その目的は、「人民を法に

従わせ、彼らの中にある悪の雑草を根絶やしにするため、アイルランド島に入り、教会の勢力圏を広げ、粗野で無知な人民に、キリスト教の真理を宣告すること」であったとされている。このときすでに、アイルランドは悪の住処であり、その人民は「粗野」で「無知」とされていたのである。その後、イギリスは「私は神の御前において、厳肅に、かつ誠実に宣言いたします。私は何人による聖体化が行われようと、主の晩餐式において、葡萄酒がキリストの肉と血に化体することはなく、現在ローマ教会で実施されているような聖母マリア、あるいは聖人といわれるものへの祈禱とか帰依は迷信であり、偶像崇拜であると確信しております」と誓わせ、カトリックの古い習慣をやめさせ、イギリス国教会へ改宗させることによって、アイルランド人民の支配を成し遂げようとしたが、成功しなかった。⁶⁾

カトリックへの弾圧は一六四九年、クロムウェルの侵冠に極まった。クロムウェルはアイルランドの反イギリス政府勢力を殲滅するための三面作戦に乗り出した。それは、一、全武装勢力の完全な解体、二、反乱に関係したすべての司祭と地主の除去、三、アイルランド全人口のプロテスタントへの改宗、というものであった。そのなかでも、最大の目的はカトリックの改宗さもなくば抹殺であった。クロムウェルの二万の軍隊は、正規の軍隊をもたないアイルランドを思うがままに蹂躪し、無力な農民や町民に対して血の弾圧を加えたのである。アイルランド人の大量虐殺と土地奪取が行われた。カトリックはアイルランド東北部（現在の北アイルランド国）の豊かな土地を追われ、その後その土地にプロテスタントのイギリス人たちが移住して来たのである。

イギリス人がアイルランドの主導権を全面的に握るようになって、かえって、一六八〇年頃のアイルランドは、チャールズ二世の統治の下で、平和で経済的發展をとげた。アイルランドはイギリスの重要な羊毛と乳製品の産地となり、ヨーロッパへ直接輸出するようにさえる。アイルランド人弾圧と屈辱の歴史は風化したかにもえた。しかし、チャールズ二世の後、カトリックの王ジェームス二世が即位すると、プロテスタントが握るイギリス議会はアイルランド・カトリックが力を取り戻すことを憂えて、オレンジ公ウィリアムスをたてて、ジェームス二世を追放してしまった。

一六九〇年、ジェームス二世はフランスの援助を受けて、政権を奪還するべく、軍隊を率いてアイルランドに上陸して北上、ウィリアム三世の軍隊はオーリム州のキャリックファークに上陸し、双方はポイン河で戦い、ジェームス二世の軍隊は撃ち破られる。翌九一年にカトリックの指揮官パトリック・サースフィールドの下にアイルランド・カトリックの全軍隊がリメリックに集結し、ウィリアム三世の軍隊と戦うが敗れ、サースフィールドと生き残った兵士たちはフランスのルイ十四世の下へ逃れる。後に彼らは海外からアイルランド・カトリックを支援し、「ワイルド・ギース（野鴨）」と称される国際渡り鳥の外人部隊になった。

その後、イギリスにプロテスタントの王位が安定することになり、プロテスタント支配による「異宗派（カトリック） 刑法」がつくられ、アイルランドで施行される。その内容は、一、カトリック聖職者の登録制と高位聖職者や修道士の追放 二、国会議員選挙権、被選挙権の剥奪 三、軍隊、行政機関、法曹界における就職の禁止、四、三一年以内の借地契約を唯一の例外として、他

の一切の土地の売買・借地契約の禁止。五、すべての学校に対するイギリス国教会による監督、カトリック子弟の海外留学の禁止。などであった。国内での教育はプロテスタントの支配下におかれ、さらに、カトリックはプロテスタントからの土地の購入を禁じられた。土地の相続権は、親族にプロテスタントがいる場合、その者がすべて相続し、カトリックには相続権がなかった。プロテスタントとカトリックが結婚した場合、土地はすべてプロテスタント系の親族のものとなってしまった。これによって、アイルランド人は市民権をすべて奪われてしまったのである。カトリックのアイランド人は死なない程度に生かし、こき使っておこうというものであった。

プロテスタント支配の構造はこのとき確立、徹底された。上層部にイギリス国教会派と非国教会派の少数、そして底辺に大多数のカトリックというもので、それはまた地主と小作という関係でもあり、支配階級と被支配階級という関係でもあった。

ジャガ芋大飢饉が起こったとき、イギリスのとった救済策は、八〇〇年にわたる屈辱のアイランド史を見事に反映、象徴するものであった。イギリスの経済政策は当時、自由放任政策であった。自由に放っておけば、経済はひとりでうまくいくという考えであったため、結局、従来の経済政策をそのまま行うということに外ならず、飢饉でなくても、アイルランド小作農民を追い詰めていた土地制度は全く改善されなかった。凶作が起き、地代の払えなくなった小作農民への生活の保障は何もなされないままであった。それどころではなく、逆に地代が払えないために土地を追い立てられる始末であった。

当時のアイルランド人民は少数のプロテスタント地主階級とカトリック小作農民に分けられるが、実情はさらに複雑であった。地主は自分の土地の一角に中世のお城のような住居を構えていたが、実際はそこに常住することは少なく、その多くはダブリンやイギリスにも住居をもっていた。そのため、土地管理人や地代取り立て人などが存在した。さらに小作農民もいくつかの階級に分かれており、地代を払って、土地を自分のものとして自由に活用している階級とその下で働く雇われ小作農民が存在し、さらに渡り労働者がその下に存在した。そうした階級構造では、飢饉があってもアイルランド人同士がいがみ合い、奪い合うということになってしまったのである。

四 小説『飢饉』

アイルランド西部地方のある村では次のような異変が起こっていた。

一八四五年八月、凶作の前兆はあったが、ほとんど気にとめられなかった。それまで暑い晴れた日が続いていたが八月の始めに天候が突然くずれて、みぞれが降り、雷がなり、大雨が降った。しかし、ジャガ芋は順調に育っていた。

一八四五年九月十一日突然報じられた。ある村では月曜日に掘ってみると順調であったのに、火曜日には茎が腐っていた。家畜にも食べさせられない状態であった。このように九月ジャガ芋の胴枯れ病がものすごいいきおいで流行し、各地のジャガ芋はほぼ全滅してしまった。原因は菌類で当時は未だ究明されていなかった。葉に黒い斑点ができ、裏側に白い黴がはえる。その胞子が雨水や

風や昆虫によって他の芋に移っていったのである。

そのように胴枯れ病の進行状況はあまりにも早く、農民が対処する時間はほとんど無かった。一八四五年の秋には胴枯れ病はアイルランド全土を襲い、ジャガ芋収穫はすでに危機に瀕してしまっていたのである。貧しい小作農民は悪臭を放つジャガ芋を湯がいて、臭気に耐えながら食べていたとも伝えられている。しかし、地主は情容赦なく、地代を取り立てて、待つことさえ許さなかった。アイルランドの窮状はイギリスの本土に報じられるようになり、救済策が検討されるようになった。イギリスのピール首相は、早速アメリカから大量のインディアン・コーンを購入して、アイルランドの穀物騰貴の防止に努めたり、公共事業を振興するなど救済に尽力した。そして、ダブリンに救済委員会を設置した。その委員会の仕事はインディアンコーンの倉庫の管理であった。

インディアン・コーンは関税をかけずに輸入したが、無料配給ではなかった。値がついていたのである。どんなに安くてもアイルランド農民は買えなかった。買えたとしても、インディアン・コーンの調理法はアイルランド人には馴染めないもので、食べたためにかえって体調を崩してしまった。しかし、それすら買えない貧しい人々は、マーケットなどの倉庫を襲って食料を奪った。飢え死にするものがあるというのに、倉庫には食料が豊富に納められていたのである。救済委員会の人々がどういふ仕事をしたのかはよくわからないが、死にかかった人々に食料を与えることよりも、倉庫から食料が奪われないように監視することに重点が置かれていたようである。

また、救済事業の一つとして公共事業計画がたてられた。道路工事で仕事を与えようとした。し

かし、肉体労働は飢えで力を失った人々の体力をさらに弱めてしまった。しかも、道路工事は完成されないままに途中で放置され、逆に道が利用できなくなってしまうあり様であった。物資の流通はこれによってさらに悪化したということである。

リーアム・オフラハティは、ジャガ芋大飢饉が引き起こした惨状を一九三七年に小説に書き表した。『飢饉』⁷がそれである。登場するのはキルマーチン一家の人々が主で、特に長男のマーチンとその妻のメアリーの思想や生き方を中心に展開する。

注目すべきはメアリーの生き方である。彼女は、神は自らを救おうとする者を救うという聖書の教えを生活のモットーとしている。気品が高く、常に積極的に生きようとする。義母マギーが世間体を気にしたり、習慣やしきたりに従った生き方をするのとは対立する。

義父ブライアンとマギーはブラックヴァリーにかなり広い土地をイギリス人の地主トンプソンから借り受けて、オハンロン一家を用人に雇っている。長男のマーチンは父親ブライアンに代わってキルマーチン家を取り仕切ろうとしている。次男のマイケルは喘息持ちで体が弱い。彼は一家の労働力にはならない。

メアリーには実妹エリーがある。エリーは土地管理人チャドウィックが住んでいるクロム・ハウスで家の世話をしている。実父バーニーは機織りである。彼は有能な弁舌家でもあり、カトリックで大衆運動の偉大な指導者オコンネルを批判する。

飢饉が不気味な前兆を伴ってブラックヴァリーに広がって行く。夏の長雨にもかかわらず、キルマーチンの畑のジャガ芋はまだ、病気にかかっている様子はない。しかし、風によって異臭が漂ってくる。まず被害にあったのは、娘のキティが嫁いでいるハーノン一家であった。パッチ・ハーノンは小作料が払えなくなり、チャドウィックに遣わされたヘガティに追い立てられる。パッチは気がおかしくなり、精神病院に入れられる。キティは七人の子供を連れてキルマーチンの家に戻ってくる。

マイケルは病気が悪化し、マギーは彼のために家畜まで殺して栄養をつけようとするが効果が無い。ついにマイケルは死んでしまう。悪魔払いと盛大な葬式が行われ、大量の酒が近所の人に振る舞われる。メアリーは物資が減りつつあるときに、死者の供養とはいえ、無駄な出費をする義母を批判する。メアリーはマイケルが死んでよかったと思う。事実、マイケルの病気のために家族の生活は圧迫されていた。労働している者が必要な栄養をとることができない状態にまでなっていた。マイケルが死んだころからキルマーチン一家の生活は急速に逼迫していく。ブラックヴァリーの羊はほとんど食べ尽くされ、ジャガ芋の蓄えもなくなった。メアリーはジャガ芋のだけに頼ってはいけないと考え、裏の山の斜面に土を入れ、野菜を植えるようにする。マギーはこれに反対するが、メアリーは敢然としてやってのける。

キティは食べ物がなくなつたので、七人の子供のうち、二番目と三番目の子をアメリカに渡らせることにした。さらに、プロテストの教区牧師コバーンの家に行き、奥さんを見事な弁舌で口説き落とし、乳飲み子二人を里子に取ってもらう。さらに残った三人の子供を連れてイギリスに渡

るための船賃まで用立ててもらおう。

土地管理人のチャドウィックは、食料は十分にあるが、かつてあった村の人々との交流を失い、孤独が積もり、気がおかしくなっていく。性格は歪み、小作人たちには残虐性を露わにし、取り立てや追い立てを冷酷にやつてのけるようになる。一方、一人になると、自殺を図ったり、異常な性格をあらさまにするようになる。酷い仕打ちを受けたエリーは心身ともに傷を負って家に戻る。しかし、チャドウィックのクロム・ハウスで働いていたというだけで、彼女に対する村人の風当たりは冷たく、村におれなくなったエリーは逃れるようにリバプールへ去って行く。

飢饉は加速をつけて広がるが、小作の地代の取り立ては一向に緩和されなかった。イギリス政府の救済活動は効果的なものは何ひとつなかった。政府は公共事業政策を打ち出し、道路工事に小作人たちを駆り集めるが、しかし、食べ物がないために労働ができず、悪いことに工事中に死人が出る始末だった。さらに悪いことに工事が途中で放棄されてしまったために、道が通れなくなり、物資が運ばなくなってしまうありさまであった。

救済物資はイギリスがアメリカから安く購入したインディアン・コインであった。しかし、イギリスはそれを無料配布したのではなく、有料化してしまった。ブラックヴァリーではハイネの店で売られたが、十四ポンドが三シリングであった。大勢の人々が餓死しているというのに、一方ではお金儲けをしていた。貧しい小作農民たちは略奪などの実力行使に出るようになる。日曜日の朝、ミサの後、貧しい人々はクロム屋敷におしかけ、小作料の延滞を申し出る。しかし、まったく請け負ってもらえない。バーニイは三つ又をもってチャドウィックにエリーの復讐をしようとするが失敗する。貧しい人々は暴徒と化し、マーチンはチャドウィックを蹴りあげる。そのために、彼は警察に追われる羽目となってしまう。クロム教区ではその後七年間武器になる恐れのある農具の使用は禁止される。

マーチンは追っ手を逃れて山中を逃げ回る。その間メアリーは子供を産む。ある晩、マーチンが夜の闇に紛れて、メアリーの部屋へ入って来る。彼の顔はすっかり変容していた。若者らしさは消え、老けていた。彼は子供と三人で海外脱出を考えている。わずかな時間の出来事であった。マーチンはまた山中に消える。メアリーは持ち前の機敏さと貪欲さで生き延びる。そして、なぜかメリカは神様が授けてくださった新天地であるかのように思うようになり、子供を連れて渡る決心をする。古い慣習もしきたりもないアメリカはまさに夢であり、希望であった。チャドウィックが夜の闇の中で何者かに刺し殺される。

ブラックヴァリーの小作農民たちは秋になっても何の収穫も得られなかった。飢餓はさらに広がり、疫病さえ流行らせた。アイルランド西部の村という村はすべて悪臭に満ち、ほとんどが全滅に近い状態になる。家という家には人々が重なるように死んでおり、道端には餓死した死体がいたる所にある。

メアリーはある男から、アメリカでアイルランドの自由のために戦うことを条件にアメリカ行きの特符をもらう。そして、ついにアメリカ行きの船に乗り込む。その船の中でマーチンに巡り会う。

この小説はこれで終る。

ジャガ芋大飢饉がアイルランド人の心に暗い陰を落としたことは事実であるが、しかし、この小説は貧困と飢餓の中にあつてむしろ富める者たちよりも生に對しても、死に對しても力強く、誇り高かったことを教えてくれる。それは、アイルランドという国が内に秘め続けた、独特な生命力にほかならず、アイルランド特有のカトリック信仰に支えられてきたものでもある。この小説の作者は、結局、大飢饉という恐ろしい「受難」を終えたアイルランドが新しいアイルランドとして生きて行く再生へのトワイライトを描き出している、と読み取れるのである。

古いしきたりや慣習の中に自らを閉じ込める無気力なアイルランドは終わった。脱皮し、国際化の中で積極的に生きていく新しいアイルランドがアメリカから始まる。自由と独立の精神の息吹は大西洋の風に乗ってアメリカからアイルランドへ舞い戻ってくる、と予感させるのである。

一九九八年、四月十日、復活祭を前にして、北アイルランドの和平へ向かつて合意が成立した。その際、イギリスのブレア首相がジャガ芋大飢饉の悲劇について「当時の英国政治家の無策にも責任がある」と謝罪した（読売新聞）ことが報じられた。この謝罪の背景にはアメリカのアイルランド系の人々の活動があるとされている。メアリーとマーチンの子孫たちが新しいアイルランドを築いて来たし、またこれから築いて行くのであろう。

注

- (1) 短編『手紙』 *The Letter, Island Stories* (O'BRIEN)
- (2) 短編『旅立ち』 *Going into Exile, Island Stories* (O'BRIEN)
- (3) 『聖者と学僧の島』の英語原題は *How the Irish Saved Civilization* となっている。日本での翻訳出版ではそれが副題になっている。因に英語原題の副題は *The Untold Story of Ireland's Heroic Role from the Fall of Rome to the Rise of Medieval Europe* となっている。
- (4) 『骨の夢』平田康訳（山口書店『イェイツ戯曲集』）
- (5) 『聖者と学僧の島』の序文から引用。
- (6) 波多野裕造著『物語アイルランドの歴史』（中公新書）を参考にさせていただいた。カトリック刑罰に関する引用も同著からさせていただいた。
- (7) 『飢饉』 *Famine* (WOLFHOUND)

その他参考書

Robert Kee, *Ireland* (ABACUS)

ダンブルトン著、桑原博昭訳『アイルランド』（あぼろん社）